新宿の板碑

板碑は、13 世紀前半から 16 世紀末に多く造られた石造の供養塔です。死者の菩提を弔う追善供養のため、また生前に自身の死後の冥福を祈るため（逆修供養）に建てられました。石材は、主に秩父が原産地の青石である緑泥片岩（りょくでいへんがん）が用いられ、この石を使用した板碑は、埼玉を中心に関東諸県からその周辺に多く分布しています。新宿区にみられる板碑も緑泥片岩を用いた「武蔵型板碑」と呼ばれるものです。

自證院 阿弥陀三尊種子板碑
弘安 6 年（1283）

さて、新宿区内の板碑をみると、区内最古は、弘安 6 年（1283）造立の自證院の阿弥陀三尊種子板碑です。この板碑は種子（梵字）で、阿弥陀を現す𑖀（キリーク）・観音を現す𑖮（サ）・勢至を現す𑖮（サク）と刻み、浄土信仰の思想を背景に建てられたものと考えられます。日本では平安時代後半から死後に仏のいる世界を目指す浄土信仰が盛んになり 13 世紀にピークを迎えます。

そのほかに、自性院にある福徳元年の阿弥陀一尊種子板碑は、公的に定められた元号ではなく「私年号」と呼ばれる、私的に使われていた元号が刻まれています。この福徳元年は、公的には延徳 3 年（1491）です。福徳元号は南関東の板碑にみられ、約 70 基以上確認されています。

私年号は政治的・宗教的な意味で用いられたものもあるようですが、ほとんどが単発でした。中には、誤記である可能性もあります。その点、福徳は多数の事例が確認されています。ではなぜ、と疑問に思いますが、この私年号は、情報伝達の際、誤って伝わり使われ続けたからとの見解がされています。改元は、飢饉が流行したときなどいくつかのルールで行われました。この時も長らく疫病が流行し、追い打ちをかけるように飢饉となりました。改元のうわさや人々の改元願望もあり作られた元号で、誤った情報が広まっていったのです。都鄙（とひ）（京都と東国）の関係や伝達ルートが単一ではなかったという影響が反映されたようです。

館蔵 阿弥陀一尊種子板碑
永享 13 年（1441）

最後に、館内展示の永享 13 年（1441）3 月 16 日阿弥陀一尊種子板碑の元号について少し紹介します。永享 13 年は 2 月 17 日に嘉吉と改元されています。しかし、この板碑は改元後も永享を使用しています。元号は天皇により改元の詔書が出され、その後関東に到着し、吉事始を経て使われ始めます。そのため、新たな元号が使用されるまでに時間がかかるのです。情報がなかったため、改元から約 1 ヶ月経っても永享が使われ続けたのです。

【参考文献】『ガイドブック新宿区の文化財石造品編』2000 年 新宿区立新宿歴史博物館
千々和到『板碑とその時代』1988 年 平凡社